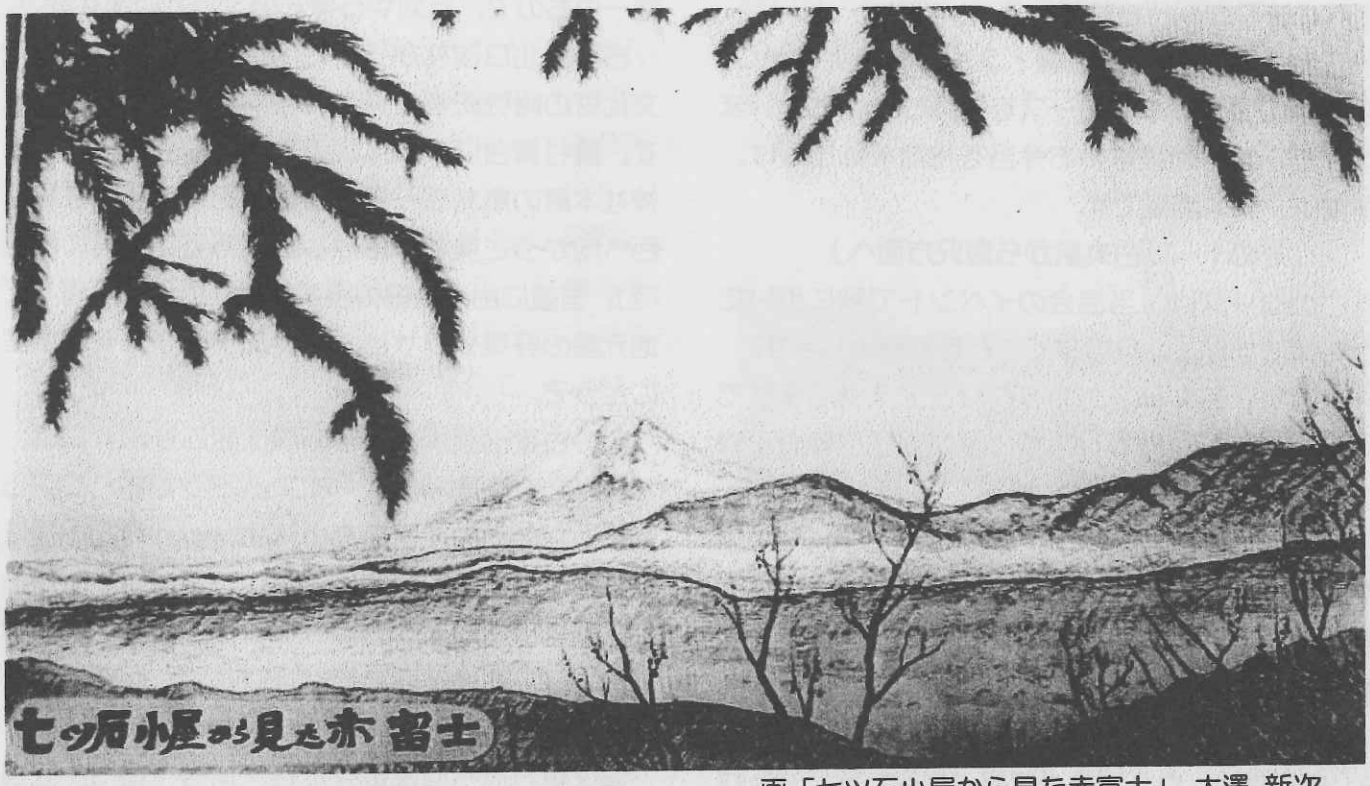
来さのせえ
奥多摩
《第48号》
平成30年1月15日
(一社)奥多摩観光協会



画「七ツ石小屋から見た赤富士」 大澤 新次

新年のご挨拶

新年あけましておめでとうございます。旧年中は、友の会への入会、イベントへの参加等ありがとうございました。おかげ様で、これまで事故もなく順調にきております。これも皆さまの協力のおかげと、感謝しているところです。

さて、今年度のイベントの中に「フットパス」という名のイベントが２つ組まれています。
すでに、１つは10月に行いましたが、参加したお客さまは、その内容について、理解していただいたと思います。いろいろな解釈がありますが、大事なのはその地域の文化に触れる、また住んでいる人たちとの交流を大事にしているところです。そして、地域の経済にも貢献することが含まれています。その地域で食事をする、特産品を買う、これもフットパスの大きな特徴です。ハイキング等ではお弁当持参が多いのですがその土地で食事をすることで、地域経済を潤すことができます。１回目のフットパスでは、食事を地域の食材を使ったふれあい農園で食べてもらい、また隣接する福祉施設「東京多摩学園」の皆さんが、栽培しているキノコ等を買っていただきました。

フットパスとは、イギリスが発祥の地といわれています。イギリスでは、民有地でもルールを守ることを条件に、誰もが歩くことの権利を有しているということです。フットパスを、推奨する町田市にある、ＮＰＯ法人「みどりのゆび」の皆さんと、私たち協会は、約10年ほど前から交流を続けており、年１度町田市からお客様を受け入れて、奥多摩を、歩いてもらっています。一昨年12月には、ガイドの会で町田市を訪れフットパスを体験してまいりました。

奥多摩町には「山里歩き絵図」があります。
これらを活用して、魅力あるルートをつくっていきたい、と考えております。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。

一社)奥多摩観光協会・名人達人ガイドの会・会長
原島 俊二

～とっておきの山里歩き～

奥多摩版「フットパスコース」

フットパスとは、歩く（foot）小径（path）という意味です。

健康プラス知的好奇心を満足させてくれるフットパスの効果は、観光やまちづくり、地域の活性化への波及が期待されています。

『奥多摩 山里歩き絵図・２１世紀の宝さがし』を基本にフットパスコースを紹介したいと思います。ここでの前提は、お弁当を持たずに出かけ、昼食は、現地調達です。

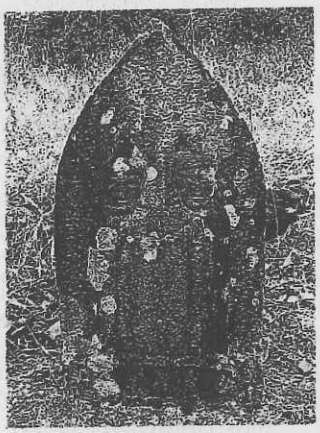
その１　「白丸駅から海沢方面へ」

このコースは、当協会のイベントで秋に歩いたコースですが、４月頃歩くことをお薦めします。

本命は、海沢神庭のカタクリとアズマイチゲですが、カテンソウやジロボウエンゴサク等の可憐な花も見逃せません。

昼食は、多摩学園前のレストラン「SAKA」。坂の上にありますが、気軽に立ち寄れて、ワインも楽しめる気軽な食事処です。食後は、学園の生徒たちが丹精込めて作った原木しいたけが格好のおみやげになります。

帰り道は、白丸湖経由で鳩ノ巣駅方面にも行けますが、旧海沢橋を渡って奥多摩駅へ。国道に面して日向集落への登り口に立つ『双体馬頭観音』は必見。一般的には、双体道祖神ですが、ここでは、一石に馬頭様がお二人並んでいます。年号を見ると、明和元年と六年で、馬主の愛馬に対する供養の気持を酌んで夫婦馬か、親子馬かなどと思いを巡らしてみてはいかがでしょうか。



日向集落経由で天然温泉「もえぎの湯」へ向かいます。古老の話を聞くと、この辺りは、古くから硫黄の匂いがしたとのこと。

ほどよい疲れを癒すなら、「もえぎの湯」を終点にします。奥多摩駅までは、あとわずかです。

その２　「古里駅から鳩ノ巣駅へ」

旧村名は、小丹波村と棚沢村。奥多摩町の中では、日照時間が長く住み易い地域です。特に古里駅構内付近は縄文時代から人が住み、かつてこの地から小学生が発見した硬玉製垂玉は、町内出土唯一のもので、石剣や石棒も出土しています。

古里駅北口改札から５分ほどの所にある町指定文化財の阿弥陀堂を見た後、熊野神社に向かいます。農村舞台は、都指定の文化財ですが、むしろ神社本殿の彫刻は一見の価値があります。さらに西へ向かうと奥多摩むかし話にある「十日の森稲荷」。国道に出て農協の農産物販売所に立ち寄って地元産の野菜やワサビ、コンニャクなどをお土産にどうぞ。

町の古里出張所のある施設「きこりん」には、平日営業の軽食・喫茶「カフェ タンポポハウス古里店」があるのでここで小休止。いったん国道に戻り西進すると間もなく旧道へ。多摩川に架かる寸庭橋を目指します。橋の上からの眺めを楽しむだけでは、ご満足いただけない方は、河原に降りて水辺や石の感触を楽しむのも一興です。

鳩ノ巣方面へは国道を歩き、信号「将門」を過ぎると、バス停「将門」があります。ここで国道と別れ、地元の生活道になっている急登に取り付きます。

５分ほどで将門神社への参道に入り、階段を上りきると本殿があり、さらに左手に進むと三面不動を祀る将門山不動尊に着きます。左手に祀られている穴沢天神社は、地名由来の多名沢（棚沢）と深い関係があるようです。三面不動を後にして棚沢の集落に入ると、鳩ノ巣駅は間近です。

※山里歩き絵図・全２２集は、奥多摩駅前の観光案内所や町役場等でケースに入れて無料配布していますのでご利用ください。　（岡﨑 学）

～行って来たあよ 雲取山～

雲取山（2017　記念登山）第２回

ステップアップ形式であった雲取山登山は９月20日の「高丸山」登山から始まった。この登山ではマルバダケブキやトリカブトの花、ナナカマドの実、ツキヨタケなどを見つけ、夏から秋への季節の移り変わりを感じることができた。

石尾根では富士山、奥多摩三山などたくさんの山を一望でき、どの山も雄大で素晴らしかった。

無事に「高丸山」登山を終え、自信と大きな期待を胸に雲取山への思いを募らせた。

待ちに待った10月５日１泊２日の「雲取山」登山は鴨沢バス停からスタートした。秋から冬への準備が進む雲取山である。ワクワクする気持ちを抑えながらゆっくりと歩みを進めた。

堂所手前の「アズキナシ」の木は青々とした葉と真っ赤な実がクリスマスカラーでとても可愛らしい木であった。

時々乱れる呼吸を整えながら登ると、ゴロゴロとした石の重なるマムシ岩。さらに登るとどっしりと登山道をふさぐようにある「おので石」に着く。ガイドの昔話が面白かった。

七ッ石神社を過ぎ、ひと登りすると七ツ石山山頂に出る。晴れていればここから雲取山避難小屋が見えるはずだが、雲と雨に愛されている私には見る事ができなかった。雄大な景色は次回の楽しみに残しておく。

ブナ坂を出るとグッと気持ちが引き締まり、防火帯を歩くワクワク感が増してきた。ガイドブックで見た景色を期待していたが雲の中だった。それでも幻想的で楽しかった。

ヘリポートを過ぎ奥多摩小屋へ着くと真っ赤な実をつけたナナカマドが迎えてくれた。季節の移ろいを感じながらさらに進む。

小雲取山を過ぎると空が明るくなり晴れる予感がした。

雲取山山荘への巻道では、足元にオサバグサを見つけた。６月に白い花をつけていたのを思い出す。亜高山帯の空気を感じながら、お楽しみの「ヒカリゴケ」へ向かう。木の根元の小さな空間に自然光でも輝く苔があり、妖精の寝床の様に見えとても可愛らしかった。

16時を過ぎ山荘に到着。気温は下がり寒く豆炭の炬燵がうれしかった。夕食後は山荘主人の新井晃一さんの面白いお話に耳を傾けた。

消灯前、外では夜景と一緒に鱗雲の間にまもなく満月になるお月様を見ることができた。一日の終わりまで感動する大満足の日であった。

２日目。雲が広がっていたがそれは高く、木々の間から雲海に浮かぶ遠くの山並みを見ることができた。「富士山とアルプスが見えるかもしれない！」と期待しながら登った。そして山頂へ。山頂標識の向こうに富士山が見えた。

南アルプスも見えていた。「わぁきれい、すごい、やった！」と何度も声に出して喜んだ。本当に素晴らしい景色でうれしかった。素晴らしい景色は避難小屋の横でも見られた。今度は滝雲だ。雲の流れる速さが心地よかった。

下山の防火帯ではたくさんの山を眺めながら雄大な景色を楽しんだ。足元のホタルブクロは静かに咲き、沢山あるマルバダケブキは綿毛をたくさん付けていた。

七ツ石山の巻き道では大きな岩肌にトリカブトの花が下を通る私たちを見張るように咲いていた。

順調に高度を下げ堂所で昼食となる。疲れはなかったが、この旅の満足感ともう少しで終わってしまう寂しさを感じていた。しかし再出発するとすぐに前日見た「アズキナシ」の木があった。葉と実の鮮やかな色に元気をもらい、その後も心地よい時間を楽しみ歩いた。「また雲取山へ来るよ」と約束し、無事鴨沢へ下りこの旅を終えた。

（会員：島　薫）

2018年奥多摩山岳事故ゼロをめざして　　山岳遭難事故事例

昨年は梅雨の時期に雨が降らずその後、夏休みに入って毎日のように雨が降っていました。8月5日台風5号とその前線の影響で大雨になり川乗谷林道は川乗橋の入り口から約700m入った所でがけ崩れが起きた。私が8月20日に行った時には、警備の人がいて、人も車も入れなかった。12月20日現在も通行できません。

そんな通行止めで通れない奥にある百尋の滝近くで事故は起きました。

9月24日、8人のパーティーは8時10分、鳩ノ巣駅から川苔山を目指した。11時40分山頂に到着、昼食後、12時20分下山は百尋の滝から川乗谷のルートを取った。下山道の入り口には川乗谷林道は通行できないと標識があったはずなのに、なぜ！

70代の女性を含むパーティーは、川苔山に登り川乗谷から奥多摩駅を目指し下山した。急な岩場を下り百尋の滝に着いた。滝は8月の台風や雨で水量が多くて、とても迫力があり来て良かったと思った。

午後2時ごろ、休憩後沢から階段を上りやや道が平らになったところで、突然バランスを崩し約10m下の沢に滑落した。たまたま下の沢で釣りをしていた2人連れの男性が大きな音に気が付き滑落を確認し、男性のうち一人は現場に行き、もう一人の男性は、携帯電話がこの場所はつながらないので、川乗谷を細倉橋方面に走り救助要請をした。午後2時25分だった。その後救助隊は川乗林道を救助に向かい、午後3時30分現場に到着、ヘリコプターで救助した。その後死亡が確認された。

川苔山は奥多摩でも一番といってよいほど人気の山で、毎年多くの登山客が登っています。特に百尋の滝周辺での事故で亡くなっている方も多くいます。今回の事例は直接通行止めとは関係なかった事故ですがルートを作成するうえで、パーティーのリーダーの判断としては適切だったのか？疑問が残る結果となりました。

突然バランスを崩す原因は何でしょうか？

1.浮石につまずく。
2.登山道の谷側を歩いていて路肩に踏み外す。
3.対向登山者とすれ違う時に谷側によけた。
4.考え事をしていて谷側に寄ってしまう。
5.山側に障害物がありそれをよけようとして。

その他いろいろな要因があると思います。私たちにはその要因を突き止めることはできませんが、少なくとも事故を起こさない、起こさせない努力は必要だと思います。日頃からそれぞれの場面、実際の登山中でもこの場所にどのような危険が潜んでいるのか？何に注意をしなければいけないのか？危険予知の能力を高めていかなければいけないのではないでしょうか？

毎年多くの事故が起こり亡くなっている人もいます。今年こそは奥多摩の山での死亡事故「ゼロ」を願って活動していきましょう。

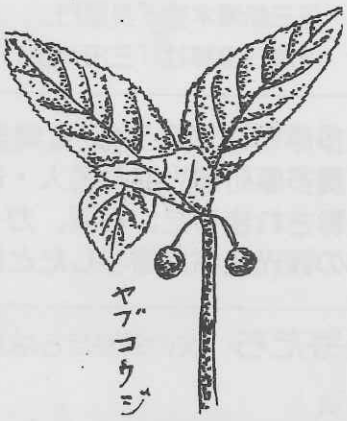
（小峰　一郎）

奥多摩樹木雑考

.～冬の森のあたたかさ～

寒々とした森の中で、濃緑の葉を繁らせているシラカシ、アラカシ、ヒサカキなどが、薄暗い林床をつくっています。その林床で紅い実をつけて存在感をしめしているのがヤブコウジです。

ヤブコウジは藪柑子、柑子（カンシ→コウジ）は甘い果実の意味ですが、食べてみるとかすかに甘いだけです。ヤブコウジは暖温帯の森の中で多く見られます。ですので、ヤブコウジが生えているところは、たとえ現在は落葉樹林であっても、ゆくゆくは照葉樹林（常緑広葉樹林）になると言えるのです。



ところで森の中の背の高い木の葉は、光合成に太陽光の中で、最もエネルギー量が多い緑光を使わないで反射させたり、葉を透過して下層の植物（ヤブコウジなど）の植物にまわしていることを、森の生態にくわしい西口親雄先生に教えてもらいました。（葉が緑に見えるのは、葉の表面から反射したり、葉を透通した緑光が、私達の目にとどくから。）そして、自分達はエネルギーの少ない赤と青紫の光を使っているのだそうです。

ヤブコウジは、エネルギー量の少ない赤い光を実から反射させて動物を誘っているところは、何とも要領がいいですね。また高木の低木への気くばりに、寒々とした森の中で営まれているあたたかな自然のすがたを感じます。

“柑子の紅（ベニ）　淡き光を集めおり”
一彦

（橋上　一彦）

奥多摩の野鳥

～冬の木の実と草の実と野鳥たち～

今回は鳥と植物について述べてみたいと思います。植物は鳥にとって食べ物を得る場所であり巣造りの場所やねぐらとして利用する鳥の生活に欠かせないものです。

間接的には、植物に集まる虫も食物の対象となります。最も重要なのは、秋から冬にかけての食物が不足する時の木や草の実です。歯の無い、そして消化管の短い鳥は葉や樹皮を食べる体の構造ではありませんので、植物の実は大変重要です。ところが、一般的には外観上などの理由から鳥たちが好んで食べる実のなる木は案外少ないようです。又、鳥の種類によって好む木の実、草の実は違いますが鳥の食物となる植物を「食餌植物」と言います。

画　大澤新次

食餌植物の必要な条件は、鳥の好む実をつけてる事、実がたくさん成る事。冬にも実がある事などがあげられます。又、鳥たちは木の実、草の実などの種子が体の中を通る事で発芽が高くなり木の実、草の実の分布拡大に大きく貢献する事になります。種子は鳥の体の中を通る事により消化酵素の働きや、体温による作用などによって発芽率が高くなったり、早くなったりするといわれています。マサキ、ネズミモチ、サカキ、トベラ、クサギ、クマノミズキ、タブノキ、などがその代表です。

今、奥多摩の里山は、北方から渡ってきた鳥たち、ツグミ、シロハラ、アトリ、ジョウビタキ、マヒワ、オオマシコ、カシラダカ、ミヤマホオジロ、や漂鳥、留鳥のルリビタキ、ウソ、エナガ、コガラ、ヒガラ、ゴジュウカラ、ウグイス、アオジ、アカゲラ、アオゲラ、コゲラ、シジュウカラ、カワラヒワ、などが木の実、草の実を求めて活動しています。

又、それをねらってオオタカ、クマタカ、ノスリ、など猛禽類が捕食活動を展開しています。奥多摩の里山は結構にぎやかです。あたたかくしてかれらの活動を見に行きましょう。木々の葉が落ち、鳥たちの姿も大変みつけやすくなっていますよ！

（畑　幸夫）

秋から冬　奥多摩山歩き
～イベント案内　1月から3月～

No.30　1月30日（火）　冬模様の御岳山
No.31　2月27日（火）　岩茸石山～関東平野を望む～
No.32　3月14日（水）　新旧の青梅街道を歩く
No.33　3月19日（月）　日の出山から大塚山
No.34　3月28日（水）フットパス奥多摩～鳩ノ巣～

小河内ダム（奥多摩湖）完成から60年　その3

昭和10年12月13日小河内村の村民は小菅・丹波両村と手を握り合って起ちあがった。「村民の生命線を守れ」と口々に叫びながら、1000名の群衆はむしろ旗を押し立てて大型バス6台を先頭に、内務省、東京府、東京市、警視庁に押しかけて、苦しい立場を陳情せんとしたが、青梅署では全署員80名が警戒にあたり、氷川大橋にて警官隊と衝突、村民側から負傷者まで出した。一方、山梨側の丹波山・小菅両村民の一部200名は中央線塩山駅からの潜入を、また小河内村の一部100名は青梅裏山伝いに御嶽駅に、他の100名は五日市に出て突破しようとした。氷川大橋の近く、奥氷川神社に押し込められた600名の村民に対し、代表者10名のみを帝都に送ることで妥協成立した。これより先12月12日、大型自動車で御嶽駅に集まった陳情団から、小沢村長他20名だけ許されて、青梅駅から帝都へ向かった。一方、山梨側の丹波山・小菅村の先発隊は、加藤小菅村長他10名が別路で帝都に乗り込んでいた。12月13日午後2時、青梅・五日市両署の警戒網を巧みに抜けて、山を越え、谷を渡って帝都に潜行した、小河内・丹波山・小菅の三ヶ村民約50名の後続隊と合流した。

内務省土木局長、東京府横山知事、牛塚東京市長などを訪ねた。それぞれ、誠意ある回答をしてくれたので信頼と希望を持ち引き上げた。その3か月後の11年3月

1. 貯水池完成の上、東京市は毎年5月20日より9月20日までの間、羽村堰より毎秒2立方メートルを常時流すこと。
2. 東京市より両府県関係用水路の改修費等として230万円を支出すること。この騒ぎで社会の同情を集め、急転直下東京府と神奈川県との二ヵ領水問題の解決に至ったのである。

「湖底の村の記録」奥多摩湖愛護会

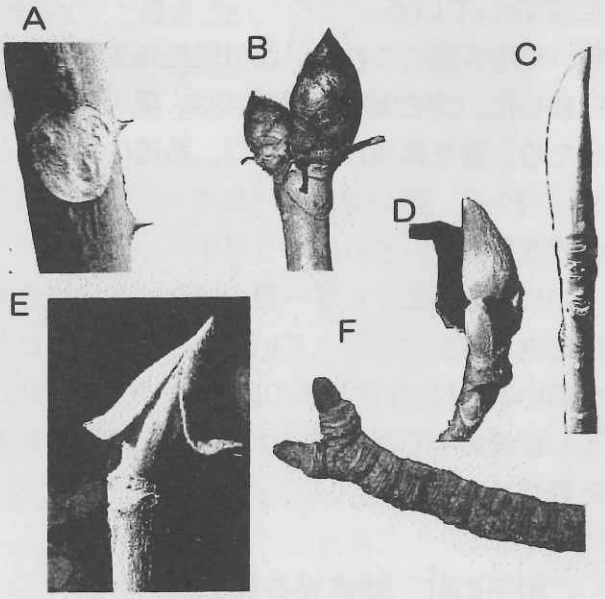
奥多摩地域情報局

山のふるさと村冬祭り1月28日(日)
ひな人形展　2月17日～3月4日文化会館
川野車人形　　3月5日　川野生活館　13時～
川野車人形　　3月11日　水と緑のふれあい館
小丹波のおはやし　4月29日　熊野神社
八雲神社獅子舞　　5月5日　八雲神社

新しい町指定文化財
11月3日に新たに町の文化財として指定されました。
① 丹三郎原島家「長屋門」
② 丹三郎澤本家「長屋門」
③ 羽黒三田神社「三田弾正の奉納額」

奥多摩町功労者表彰　産業表彰に一般社団法人「奥多摩町観光協会名人・達人ガイドの会」が表彰されました。日頃、ガイドの活動が奥多摩町の観光産業に寄与したと評価されたものです。

冬芽たち　次の冬芽たちはだれか？分かるかなー



答え　A-カラスザンショウ　B-ヤチダモ　C-ホウノキ
D-ハウチワカエデ　E-リョウブ　F-ヒカゲツツジ

次号発行予定：平成30年4月15日

発行　一般社団法人 奥多摩観光協会
住所　〒198-0212　奥多摩町氷川210
電話　0428-83-2152 FAX 0428-83-2789
編集　名人・達人観光ガイドの会